

“非テキスト”という概念と テキスト性の欠如について①)

島山 勝彦

0. はじめに

本稿では、テキスト言語学において、文の文法においては‘非文’に相当する概念‘非テキスト’を導入することが妥当であるかどうかという問題について論ずる。

テキスト②)は一般に様々なレベルの言語単位から成る言語表現の首尾一貫性のひとつのあらわれとしてとらえられており、そのテキストとしての資格を保証すると考えられている諸性質はテキスト性③)とよばれている。

文を分析の最高単位とする言語学においては、その分析の対象となっている言語資料を音韻・形態・統語・意味の面からみて、それが、ネイティブスピーカーにとって受け入れられるものであるかどうか、すなわち、その表現が文法的に正しい形式を備えているかどうかによって、文／非文が判定されるが、テキスト言語学においては、研究者にとってすでに明らかにテキストと認められる言語資料の中に見いだされる特徴（これらはほとんどの場合、文の内部構造を表わすのに用いられる術語の範囲を超えるものである）の存在をもってそれがテキストとして認定される根拠とされているようである。

de Beaugrande と Dressler は、テキストをテキスト性の7つの基準を満たした“伝達的なでき事 (KOMMUNIKATIVE OKKURRENZ)”と定義している。それゆえ、もしこれらの基準のうちどれかひとつでも満たされていないとみなされれば、そのテキストは伝達的ではないとされ、それら非伝達的なテキスト(nicht-kommunikative Texte)は“非テキスト (Nicht-Texte)”として扱われる、と彼らは主張する④)。

彼らがあげる7つの基準とは、Kohäsion, Kohärenz, Intentionalität, Akzeptabilität, Informativität, Situationlität, Intertextualitätである。

彼らは、人間の行動としての言語理論における文の適格性(文法性)の判断が確かに困難であることも考慮に入れ、これらのテキスト性の基準が大きくゆるがされた時にのみ、問題となっている言語資料が非テキストとされるべきだと一応ことわっている。そして、この“文／非文”、“テキスト／非テキスト”の区分が意味を失うにしたがって、表現の効率、効果、妥当性の段階的差異が意味をもってくるということに

も言及している(㊦5)。

しかし、テキスト研究者にしばしば見られるこのような、言語資料を分析してその中に発見した諸性質をテキストとしての資格を保障する性質であると断言するだけで、これらの諸性質を備えながらもテキストとはみなすことができないような言語資料が存在するのではないかということについて考慮しない研究方法は片寄ったものであるように思われる(㊦6)。また言語資料内に発見した要素や関係を Kohäsion や Kohärenzを作りだすものであると断言しておきながら、果してこれらの要素・関係だけで彼らが Kohäsion や Kohärenz と名づけるところの性質を構成するのに十分なのだろうかということについて検討しないのも奇妙なことである(㊦6)。

わたしは、これらの一般にテキストとしての資格を保障すると考えられている諸性質とそれらの欠如形式との関係の考察をとおしてテキスト／非テキストの問題について論ずる。

1. テキストに内在すると考えられている諸性質

1. 1. de Beaugrande と Dressler の見解

テキストに内在すると考えられている諸性質、あるいはテキストとしての資格を保障すると考えられている諸性質については数多くの研究がある(㊦7)が、de Beaugrande と Dressler は自らのあげた諸性質に詳細な記述をし、またこれらの諸性質と非テキストとの関係についても言及しているので、本稿での議論を進めて行く上で有益だと考えられる。それゆえ彼らの見解をまず最初にひとつの例として紹介する。

彼らは、先に述べたとおり、テキスト性として7つの基準をたてている。

[Kohäsion] (㊦8)

Kohäsion とは表層テキストの構成要素同士がどのように互いに結合されているかということに関する術語である。これら表層の構成要素は文法形式によって関係づけられているので Kohäsion は文法的依存関係に基づくといえる。

このことを彼らは次の例を用いて説明している。すなわち

LANGSAM
SPIELENDE KINDER

(逐語訳)

ゆっくりと

遊んでいる 子供たち

という交通標識は、「ゆっくり運転せよ。この付近では子供たちが遊んでいる。」ということを経営者に認識させようとする意図でつくられているが、もしこの標識が次のようであったなら、運転者は理解に苦しむであろう。

Kinder spielende langsam

これは *spielende* が *spielen* となりドイツ語として適切な文となったとしても、交通標識としては依然理解しがたいものである。また前者の標識は場合によっては“遊びに際してゆっくりしているのろまな子供たち”とも解釈され得る。しかし、やはりこの標識の場合は *langsam* と *spielende Kinder* とに分割する方が一般的な解釈である。

このような多義性(あいまい性)に対して言語使用者はふつうなんら困難を感じない。これはテキストの意味がその表層のみから明らかになるのではなく、さらに *Kohäsion* と他のテキスト性の基準との間の相互作用が必要であるからであり、このことによって伝達が効果的になるからなのだと彼らは主張する。

[*Kohärenz*] (9)

Kohärenz は、テキスト世界を構成する諸要素、すなわち表層テキストの基礎になっている概念と関係の集まりを互いに結びつける機能のことである。この場合の概念とは、多かれ少なかれまとまりをもって活性化されあるいは意識に呼び戻され得る知識のかたまりのようなものとして規定される。関係とはテキスト世界に同時に現われる概念間の連結子である。どの連結子も概念標識をとめない、それによって関係を生み出す。例えば、*spielende Kinder* の *Kinder* は事物の概念の標識を持ち、*spielen* は行動の概念の標識をもつ。そしてこの間に、*Kinder* が行動の担い手であるという理由から“～の行動主体”という関係が成り立つ。テキスト内における関係はいつも明示的に与えられているとは限らない。言語使用者は、テキストが有意味なものになるまで必要な数の関係を付与していかなければならない。上記の交通標識における“LANGSAM”は、運動の量としての方が、子供あるいは遊びの性質としてよりも有意味なものとなる。

〔Intentionalität〕 ㊦10)

Intentionalitätは伝達目的を果すために KohäsivかつKohärentなテキストを生みだそうとするテキスト産出者の姿勢に関わる術語である。くだけた会話などの場合、テキスト受容者の努力により完全なKohäsionなしでも理解が達成されることが多いが、もしテキスト産出者がKohäsionとKohärenzをないがしろにするならば、伝達は円滑にいかなくなり、ついには全く不可能にさえなり得る。

〔Akzeptabilität〕 ㊦11)

Akzeptabilitätは KohäsivでKohärentなテキストを期待するテキスト受容者の姿勢に関わる術語である。この姿勢は、受容者の社会的・文化的背景と深く関係する。それゆえテキスト産出者に明らかに Intentionalitätがある場合でも、この Akzeptabilitätが障壁となって伝達がうまく行なわれないことも起こる。

〔Informativität〕 ㊦12)

Informativitätは、普通ならば内容をあらわすのに用いられるが、この場合は情報の提供が受容者にとってどの程度新しいものであったか、予期せぬものであったかを示すのに用いられる術語である。

〔Situationalität〕 ㊦13)

Situationalitätは、テキストを伝達場に適ったものさせる要因に関わる術語である。先の交通標識の例では、異なる解釈が可能であったが、ふさわしい解釈がどれであるかは明らかだった。このテキストがどのような状況におかれたものであるかがはっきりしていたからである。

〔Intertextualität〕 ㊦14)

Intertextualitätとは、あらたなテキストの使用が、かつて理解したテキストの知識との関連においてなされる事示す術語である。先の交通標識を見た後に、

GESCHWINDIGKEITSBESCHRÄNKUNG AUFGEHOBEN

スピード制限解除

という標識を見たら、まず何かが前になされていないかぎり解除 (AUFGEHOBEN) され得ないのだから、前にどのような注意がなされていたのかということは理解できるし、スピード (GESCHWINDIGKEIT) も第 1 番目の標識が現われる前にだされていたものと解釈される。

1. 2. 上記の諸性質同士の関係

上記の諸性質がすべて同じ重要度をもって働いているわけではないことはあきらかである。de Beaugrande と Dressler も述べているとおり Kohäsion と Kohärenz はテキストの構成要素に関わる概念であり、その他はテキストの使用者 (産出者・受容者) に関わる概念である⑮)。

テキストの素材そのものに関係する Kohäsion と Kohärenz のうち、前者はかなりの程度まで客観的な記述が可能ないように思えるが、後者の場合は個人的な要素が影響を与えて、コンセンサスにはいたらない場合もあり得る。

テキスト使用者に関係する概念のうち、Akzeptabilität の一部は、わたしには“解釈可能性”として分離するべきもののように思われる。その解釈可能性を除いた部分と Intentionalität は、テキスト受容者や産出者が kohäsiv で kohärent なテキストを期待したり意図するといっても、態度というひとつの行為であり、Kohäsion や Kohärenz というレベルをとおしてなされるものではない。

Informativität がテキストとしての資格の問題に関わっていると考えるのは、わたしには、無理があるように思われる。あらゆる表現はなんらかの意味で informativ であると言って良いであろう⑯) 。この概念は、個々の受容者のみに関わる問題である。

Situationalität は、言語資料の内容に全く関与しない。Kohäsion に関する説明のなかで見た交通標識を道路の上に掲げようと、ある子供たちについての説明に使おうと、あるいは新聞の広告の中で見ようと、言語資料自体の価値には変わりがない。ある知らない外国語の言語資料を日本に持ってきても、その言語資料がもとの国でテキストとして認められるものならば、たとえ読解できなくとも、それはテキストである。

Intertextualität は、上記の説明から考えると独立した性質というよりむしろ Kohärenz および Kohäsion に関連するものであるように思われる。Intertextualität で問題にされる 2 つあるいはそれ以上の言語資料の間には Kohärenz および Kohäsion に關して潜在的な連続性があるわけで、ひとつの言語資料のみが対象になる時と異なり、2 つあるいはそれ以上の段階の概念操作 (この場合は当該の言語資料を有意味なもの

にしようと、Kohärenz/Kohäsionの達成と発見に努めること)を行なう。この IntertextualitätもKohärenzとKohäsionのひとつの操作とみなされるべきである。

1. 3. 問題点

de BeaugrandeとDresslerの方法の問題点は、彼らのたてた基準の不統一性というよりも、むしろテキストをいくつかの性質の共起したものという一段抽象度の高いレベルでとらえようとしたことにある。記述においては当然のことながら様々な抽象化が可能であるが、彼らも彼らの抽象度において多くの性質の発見に努めている(⑩17)。しかし先に述べたように、言語資料を分析してその中に発見した諸性質をテキストとしての資格を保障するものであると考えるだけではなく、これらの諸性質を備えながらもテキストとはみなすことができないような言語資料が存在するのではないかということに関心を持ったり、あるいは言語資料内に発見した要素や関係を Kohäsion や Kohärenzを作りだすものであると考えるだけでなく、これらの要素・関係のみで KohäsionやKohärenzを実現するのに十分なのかということを検討しようとするならば(⑩6)、これらの諸性質とその欠如形式との関係のみならず、de Beaugrande と Dresslerが名づけるところのKohäsionを2つのレベルに分離(⑩18)して、さらにその各々の欠如形式を考察の対象にすることが必要に思われる(⑩19)。

2. テキスト的であること具体例

自然なまとまりの感じられる文連続となら一貫性を見出されない文連続が存在することは事実である。前者は一般にテキスト的とみなされるようである。しかし“テキスト的である”ということの条件をあげることはたいへん困難である。

ここに Enkvistからの例をあげる(⑩20)。Enkvistは、Coherence, Pseudo-coherence, Non-coherenceというように一貫性の段階的考察を試みている。

- 1) I bought a Ford. The car in which President Wilson rode down the Champs Elysées was black. Black English has been widely discussed. The discussions between the presidents ended last week. A week has seven days. Every day I feed my cat. Cats have four legs. The cat is on the mat. Mat has three letters.

2) George's high pass was headed to the right. The forward shot at once without dribbling and made a goal. The referee declared the kick offside.

3) Do you know John Smith? She came to see Peter.

これらの Enkvistからの例文についてコメントする前に断わっておくべきことは、これら3つの例は、わたしにとって、すべてテキストであるということである。

1)の例は、a Ford-The car, black-Black, discussed-discussions, week -A week, days-day, cat-Cats, Cats-cat, mat-Mat という表層上での明らかな連続性を示すが、内容には一貫性を持っていないように思われる。Enkvistはこの例をPseudo-coherenceとよんでいる。

2)の例には、1)の例で観察されたような表層上での連続性は見当たらないが、この例には明らかに内容上のまとまりを感じる。Enkvistはこの例を coherenceとよんでいる。

3)の例には、表層的な連続性も、内容的な一貫性も感じられない。Enkvistはこの例を non-coherenceと呼んでいる。この例に納得のゆく理由づけを行なうのはたいへん困難であると思う。

上の例の観察からとりあえず言えることは表層上の連続性は Kohärenz(coherence)の必要条件ではないということである。

Enkvistは、1)の例を一見 cohesion の表層のある条件を満たしているが、実際は non-coherence であると感じる、と述べている。1)にはそのような存在として Pseudo-coherence という名前を与えようとしたのである。

3. テキストとテキスト性

上の具体例では、de BeaugrandeとDresslerのあげた7つの性質のうち Kohäsion (cohesion)と Kohärenz(coherence)だけを見た。7つのうち、なんとか外形的アプローチが可能なのはこのふたつだけのようだからである。しかしこのふたつの特徴だけがテキスト内部に関わる性質だと言っているわけではない。わたしは Enkvistの言うCohesionは下位区分されるべきだと思っている(21)。それらの性質とその欠如形式との考察を通してテキスト構造の研究は進められるべきである。そのことについて述べる前に、テキストの定義についてすこし触れておくことにする。

テキストをどのようなものとしてとらえるかという立場は大きく分けて3つある。

一番目は伝統的な文献学的見方で書物などの書かれたものを意味する場合。

二番目はある言語資料が外形的な特徴から判断されて、テキストとして受け入れられる場合(22)。

三番目はある言語資料に納得のゆく解釈を与えることができる場合(22)。

これらのような場合に我々はテキストという言葉を使っている。要するに「テキストとは何か」などという問いは、定義で決まるものゆえあまり意義のあるものには思えないのだが、この定義がテキスト言語学におよぼす影響は大きい。わたしの立場では、テキスト言語学においては「非テキスト」という概念は導入するべきではない。

テキストをいくつかの特徴の望ましい形での共起と見る立場は、望ましいコミュニケーションのひとつの実現をひとつのテキストと見なす立場であるが、この立場の問題点は、この方法では、プラグマティクスの面からの探究が主となり、文の文法とプラグマティクスの間にくる文連鎖の研究がおろそかになることである。

そして、この立場のあやまちは、「非テキスト」という概念を、文の文法における「非文」のアナロジーから導きだしたことである。この非文という概念は、文の構成要素自身の適格性およびそれらの依存関係がくずれた時、自動的に導きだされるものであるが、非テキストという概念は、いまのところ一体いくつあるのか不明で、かつわかっているものの場合でもそれらの相互関係を根拠づける有力な説をもたない、いわゆるテキスト性という諸性質の有無から決定されるものである。研究者が自分の理論に基づき決定したテキスト性という諸性質の有無がテキスト／非テキストの判定の基準であるというのはおかしなことである。なぜならこれらのテキスト性とよばれてきている性質は実はテキスト内在的な(テキストに固有という意味での)性質ではない。テキストに固有な性質と思われているものは個々の研究者が個々の理論に基づく観察によって認識しただけのものである。この認識したものが見いだされない言語資料が眼前に現われたからといってそれを非テキストと名づけるのは得策ではない。順序が逆である。

文における、音韻・形態・統語というものは、我々の分析により認定されるものであるといっても、言語形式に内在する性質であると言ってよい客観性をもっている。しかしながらテキスト性というものは、これらと性格を異にする。テキストという概念はニュートラルであるべきである。すなわち言語資料といえるものはすべてテキストとみなすべきで、その上で様々なテキスト性の有無を問い、表現の多様性の探究を行なうのがよりよい立場であると思う。Enkvist の 1) を例にとれば、同じ連続性でも純粹に外形的な意味での連続性となんらかの動機づけの見いだされる連続性とを区

分すべきである②23)。わたしには、個々の理論に基づいてこれらの性質（外形的に定めることができるものは単位として）を定め、それらの正／負によって言語資料（テキスト）の多様性をさぐる立場をとる方がよいと思われる。

【注】

- 1) 本研究は、“Textkohärenz” Interdisziplinäre Konferenz im Zentrum für Interdisziplinäre Forschung（西独ビーレフェルト大 1983年11月）における共同研究（Katsuhiko Hatakeyama, János S. Petőfi, Emel Süzer）、“TEXT, KONNEXITÄT, KOHÄSION, KOHÄRENZ”の基本的な考え、特に第6節“Diskontinuität—Diskonnexität, Diskohäsion, Diskohärenz”における考えに基づいて、上記の研究では言及しなかったテキストの定義に関する問題について筆者の見解を述べたものである。
なお上記の研究は、Petőfi (1981a)をその核とし、最終稿は3人の著者により数多く行なわれた討論の結果をまとめたものとなっている。
- 2) “テキスト”と共によく用いられる術語“ディスコース”との関係については、de Beaugrande 1980、“Dictionnaire de linguistique” 1973、van Dijk 1977を参照。
- 3) テキストおよびテキスト性については、de Beaugrande 1980、de Beaugrande & Dressler 1981、Coseriu 1980、Daneš-Viehwegger (hrsg.) 1976、1977、Heger 1976、Petőfi (ed.) 1979、1981bを参照。
- 4) de Beaugrande & Dressler 1981、P. 3。
- 5) 同上 P. 35 より。
- 6) Hatakeyama-Petőfi-Süzer 1984. in: 7.4。
- 7) de Beaugrande 1980、Charolles 1983、Coseriu 1967、Crothers 1978、van Dijk 1979、Enkvist 1978、Halliday & Hasan 1976、Harweg 1968、Hobbs 1978、1979、Langleben 1981、Marello 1979、Neubauer (ed.) 1983、Üstman (ed.) 1978、Petőfi (ed.) 1979、1981 b、Petőfi-Süzer (eds.) 1983、Reichmann 1978、Vasiliu 1979、van de Velde 1981などを参照。
- 8) de Beaugrande & Dressler 1981. Pp. 3-5より。
- 9) 同上 p. 5 より。
- 10) 同上 pp. 8-9 より。
- 11) 同上 pp. 9-10より。

- 12) 同上 p. 145 より。
- 13) 同上 p. 12より。
- 14) 同上 pp. 12-13 より。
- 15) 同上 p. 8 。
- 16) 同上 p. 11、9行目では「どのテキストも結局のところなんらかの点で informativである(傍点は筆者)」と言っている。
- 17) 同上 p. 15。
- 18) Hatakeyama-Petöfi-Süzer、4.1.を参照。
- 19) 同上 第6節、第7節を参照。
- 20) Enkvist pp. 110-111 。
- 21) Hatakeyama-Petöfi-Süzer を参照。
- 22) 同上 in: 7.1 。
- 23) Kunoの談話文法における省略法の研究は、連続性の中の動機づけをもった不連続形式の研究であると思う。

【参考文献】

Ajdukiewicz, K.

1935. "Die syntaktische Konnexität", Studia Philosophica 1: 1-27.

Bar-Hillel, Y.

1953. "A Quasi-Arithmetical Notation for Syntactic Description",
Language 29: 47-58.

de Beaugrande, R.

1980. Text, Discourse, and Process, (London: Longman).

de Beaugrande, R.- W. U. Dressler

1981. Einführung in die Textlinguistik, (Tübingen: Niemeyer).

Charolles, M.

1983. "Coherence as a principle in the interpretation of discourse",
Text 3/1: 71-98.

Coseriu, E.

1967. "Lexikalische Solidaritäten", Poetica 1: 293-303.

Coseriu, E.

1980. Textlinguistik. Eine Einführung. Herausgegeben und bearbeitet von

- J. Albrecht. (Tübingen: Narr).
- Crothers, E. J.
 1978. "Inference and Coherence", Discourse Processes 1: 51-71.
- Daneš, F. – Viehweger (eds.)
 1976. Probleme der Textgrammatik, (Berlin: Akademie-Verlag).
- Daneš, F. – Viehweger (eds.)
 1977. Probleme der Textgrammatik II, (Berlin: Akademie-Verlag).
- Dictionnaire de linguistique
 1973. ed. by Dubois, J. et al. (Paris: Larousse).
- van Dijk, T. A.
 1977. Text and Context. Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse, (London: New York: Longman).
- van Dijk, T. A.
 1979. Macro-Structures, (Hillsdale, N.J.: Erlbaum).
- Enkvist, N. E.
 1978. "Coherence, Pseudo-Coherence, and Non-Coherence",
 in: Cohesion and Semantics, ed. by Östman, J.-O. (Åbo: Stiftelsens
 för Åbo Adademi), 109-128.
- Halliday, M. A. K. – R. Hasan
 1976. Cohesion in English (London: Longman).
- Hatakeyama, K. – J. S. Petöfi – E. Sözer
 1984. "Text, Konnexität, Kohäsion, Kohärenz", in: Kontinuität und Diskontinuität in Texten und Sachverhaltskonfiguration, hrsg. von
 Maria Elisabeth Conte, Hamburg (im Druck).
- Heger, K.
 1976. Monem, Wort, Satz und Text, (Tübingen: Niemeyer).
- Herweg, K.
 1968. Pronomina und Textkonstitution (München: Fink).
- Hobbs, J. R.
 1978. "Why is discourse coherent?" (Menlo Park: Stanford Research Institute, AI-TR 176).
- Hobbs, J. R.
 1979. "Coherence and Coreference", Cognitive Science 3: 67-90.

Kuno, S.

1982. "Principles of Discourse Deletion", in: Preprints of the Plenary Session Papers, The XIIIth International Congress of Linguistics, (Tokyo), 36-46.

Langleben, M.

1981. "Latent coherence, contextual meanings, and the interpretation of text", Text 1/3: 279-313.

Marello, C.

1979. "Text, coherence and lexicon", in: Text vs. sentence, ed. by Petöfi, J.S., (Hamburg: Buske), 618-633.

Neubauer, F. (ed.)

1983. Coherence in natural language texts, (Hamburg: Buske).

Östman, J.-O. (ed.)

1978. Cohesion and Semantics, (Åbo: Stiftelsens för Åbo Adademi).

Petöfi, J.S. (ed.)

1979. Text vs. Sentence. Basic Questions of Text Linguistics. (Hamburg: Buske).

Petöfi, J.S.

- 1981a. "Texttheoretische Forschung, Aspekte der Textkohärenz, Sprachunterricht", in: Text, Kontext, Interpretation. Einige Aspekte der texttheoretischen Forschung, hg. von Dorfmueller-Karpusa, K. und J.S. Petöfi, (Hamburg: Buske), 235-258.

Petöfi, J.S. (ed.)

- 1981b. Text vs. Sentence. Continued. (Hamburg: Buske).

Petöfi, J.S. — E.Sözer (eds.)

1983. Micro and Macro Connexity of Texts. (Hamburg: Buske)

Reichmann, R.

1978. "Conversational Coherency", Cognitive Science 2: 283-327.

Vasiliu, E.

1979. "On some meanings of 'coherence'", in: Text vs. sentence. ed. by Petöfi, J.S. (Hamburg: Buske), 450-466.

van de Velde, R.G.

1981. Interpretation, Kohärenz und Inferenz. (Hamburg: Buske).

The notion "non-text" and the absence of textuality.

Katsuhiko Hatakeyama

The purpose of this paper is to discuss the question of whether it would or would not be appropriate/necessary to introduce the negative counterpart for the text notion (and to call it "non-text") in textological research.

By introducing the negative counterparts of some properties that can be seen in texts, I treat this subject.

The reason I introduce those negative counterparts is that, in most cases, only such verbal objects used to be analysed which are for the researchers doubtless texts.

I think it necessary to supplement the analysis of all the properties assignable to verbal objects with the analysis of the lack of them.

I conclude that we should not introduce the negative counterpart for the text notion if we expect good results in textological research.